

※ 本発表では侮蔑的な言葉や攻撃的な言葉、蔑称やヘイトスピーチを引用・例示することがあります。

女性差別、黒人差別、在日朝鮮人差別や部落差別などの社会的マイノリティ集団（以下、マイノリティ）への差別の特別な性質を考える。その解明は差別をめぐる議論にとって最大の課題だからである。マイノリティの境遇はかねて抑圧や従属化といった言葉で論じられてきた。例えば、A・メンミは抑圧を「蝸の足」に喩え、M・フライは「鳥籠」に喩えた。これらの比喩が表現しているのは、マイノリティを抑圧するのは単独の差別行為ではなく、相互に繋がった複数の行為だという事実である——「構造」という語も概ね同じことを指している。

では、どのように繋がっているのだろうか。この問いを考えるにあたり、差別的蔑称（slurs）やヘイトスピーチをめぐる議論は有力な補助線になる。ヘイトスピーチや蔑称をめぐる考察の課題は、単発の侮蔑や罵倒、脅迫との違いの説明にあるからである。

例えば、「ゴミ」「カス」「死ね」「バカ」等はそれ自体、侮蔑や侮辱または脅迫であり得る。しかし、これらとマイノリティを対象とした蔑称やヘイトスピーチは異なる。社会的マイノリティを対象とした蔑称やヘイトスピーチの方が貶める力、攻撃力や破壊力が大きく、道徳的により不当性だと思われる（ただ、本発表では道徳的評価の根拠は扱えない）。

では、何が違うのだろうか。すぐに分かるのは、「ゴミ」「死ね」等は標的が限定されないという点である。つまり誰でもこれらの言葉の標的になり得る。他方、特定の集団を対象とした蔑称やヘイトスピーチは、まさにその集団を集団たらしめる特徴、典型的には可視的な身体的特徴に基づいて人々を限定して貶め、攻撃する。

しかし、特定の特徴に基づいて人びとを限定して侮蔑し攻撃する、というだけでは粗すぎる。例えば「デブ」や「チビ」は——その標的とされる人々を「マイノリティ」と呼べるか否かは措いて——、「ガリガリ」や「デカ（い）」とは異なる。これらはどれも身体的な特徴を揶揄し侮蔑する表現であり得る。だが、「デブ」や「チビ」は、「ガリガリ」や「デカ（い）」よりも侮蔑的な含意が強い。また、対象者が「男性」である場合、「チビ」の侮蔑的な含意は強まり得る。「女性」の場合「デカ（い）」が侮蔑的な意味を含みうる。そしてこれらは、残念ながら子どもでも知っている。

では、何が違うのか。相手個人の傷つまり害の大きさに違いを求めることはできない。「ゴミ」や「ガリガリ」という言葉で多大な傷を負う人もいるし、「チビ」や「デブ」と言われても特に気にしない人もいる。発話者個人の意図や信念などに違いを求めることもできない。強い悪意や貶める意図で「カス」「デカイ」と言う人もいるし、ごく軽くカジュアルに「デブ」等の言葉が使われることも、残念ながらある。

では、何の違いもないのか。違いはないと言うとすれば、解明すべき現実を覆い隠すことにしかならない。事実、こうした違いの説明こそが、ヘイトスピーチや蔑称をめぐる議論にとって主要課題である。

ここで大雑把に言えば、違いは「文脈」にあると言える。だが、では文脈とは何か。文脈

がいかにして違いを作り出すのか。例えば、文脈が個々の場面で特定の言葉の攻撃力（等）を強化すると言えるとして、それはいかにして可能になるのか。文脈が重要な働きをすることで——これにはほとんどの議論で異論はない——、その働きとはどのようなものなのか。

本発表では、これらの問いに対して「推論」という観点からアプローチする議論を概観し、それに一定の説得力があることを確認する。そしてそこから、明示的な発話を伴わないような差別行為の考察にとっても（例えばマイクロアグレッションやインターセクショナリティなどの言葉の理解を含めて）、重要な示唆が得られることを示したい。